

# 言語の有契性について

尾形 良道

## I. 有契性

### 1. 有契性と恣意性

プラトンの「クラティロス」(Cratylus)は、言語哲学史上最初の文献であるが、その開巻劈頭から、命令(Nomination)について、それが「物の本性」によるとするクラティロスと、「慣性」によるとするヘルモゲネスとの論争が、ソクラテスの前で展開する。この「自然派」(Naturalists)対「慣習派」(Conventionalis)との対立は、現代まで続いており、ソシュールは、恣意性を強調し、「慣習派」の立場をとった。

言語を“The language is a system of arbitrary vocal symbols by means of which a social group cooperates.”と定義した場合、言語は、命名に関して、恣意的である。つまり慣性によると見なければならぬ。確かに、英語で「神」を GOD とよび、DOG は「犬」を意味するのは恣意的である。

スティーヴン・ウルマンは、彼の多くの著書において、名の有契性(Motivation of the names)について述べている<sup>1)</sup>。すなわち、確かに命名には恣意性が多いが、有契性のある場合も、また、多いことを示している。

ウルマンは、言語における有契性を、言語の普遍的特性(universal feature)とみなしている。また、彼は、その有契性を各言語について調べた場合、諸言語における透明語(transparent words)すなわち有契性を持つ語と、不透明語(opaque words)の割合は異なることを強調している(ここに彼は言語の型(typology)の一つの規準を見つけようとしている)。彼は、この事に関して、サビアの言葉を、1920年代の予言的な言葉として引用している。

... it must be obvious to anyone who has thought about the question at all or who has felt something of the spirit of a foreign language that there is such a thing as a basic plan, a certain cut, to each language. This type or plan or structural “genius” of the language is something much more fundamental, much more pervasive, than any single feature of it that we can mention, nor can we gain an adequate idea of its nature by a mere recital of the sundry facts that make up the grammar of a language.<sup>2)</sup>

一つの言語に関しても、それを歴史的に見ると、透明な語の増減の変化がみられる。たとえば、古代英語には、現代英語より透明な語が多かった。たとえば、heofon (heaven) という語から 50 近くの語が作られていた(例: ‘heofon-candle’ で ‘sun’, ‘moon’, ‘star’ を意味していたし、‘heofon-weard’ で ‘Heaven’s

keeper’, ‘God’ を意味していた<sup>3)</sup>)。

ウルマンは、透明性(transparency) というものを ‘self-explanatory, motivated within the language itself’ と規定している<sup>4)</sup>。彼のよく例に出すものを例にとりて言えば、英語の ‘thimble’ や、それに相当するフランス語の ‘de’ は、外国人がそれを聞いても、その意味するものを理解出来ないが、ドイツ語の ‘Fingerhut’ は、その語を構成している二つの要素 ‘Finger’ と ‘Hut’ を知っていれば、その意味するものをすぐ理解できる。すなわち、英語の ‘thimble’ は、不透明(opaque) だが、ドイツ語の ‘Fingerhut’ は透明であるとする。

英語とドイツ語を少々比較してみると：

| 英語      | ドイツ語                             |
|---------|----------------------------------|
| glove   | Handschuh (‘hand’+‘shoe’)        |
| skate   | Schlittschuh (‘sledge’+‘shoe’)   |
| beef    | Rindfleisch (‘ox’+‘meat’)        |
| pork    | Schweinefleisch (‘swine’+‘meat’) |
| mutton  | Hammelfleisch (‘sheep’+‘meat’)   |
| chicken | Hühnerfleisch (‘hen’+‘meat’)     |

これだけでは証拠として乏しいが、ウルマンの定義から言っ

て、ドイツ語の方がより多くの透明語を持つ。

以上、透明性の例として、形態素上の有契性についてみてきたが、ウルマンは、それを含めて、有契性について 3つの型を認めている<sup>5)</sup>。

- (1) Phonetical motivation : ‘splash’, ‘swish’, ‘sizzle’, ‘boom’, ‘pop’, ‘totter’ などにみられる有契性。
- (2) Morphological motivation : ‘arm-chair’, ‘thinker’ ‘re-tell’, ‘forget-me-not’ などにみられる有契性。  
ここで ‘arm-chair’ の構成要素 ‘arm’ と ‘chair’ は、いずれも透明であるとは言えない。つまり morphological level では構成要素個々の透明性は問題にしないのである。
- (3) Semantic motivation : ‘the bonnet of a car’, ‘the pivot on which a question turns’, ‘the foot of a mountain’ などにみられる有契性。

## 2. Phonetical motivation

上にあげた 3つの有契性のうち、(1) の phonetical motivation は、いわゆる sound symbolism のことであり、それはさらに 2種類に分類できる。

- (1) Onomatopoeia (擬声) または Echoism (反響) この motivation によって作られた語を Onomatopoeic word または Echo word という。  
baa (-baa), cuckoo, meow, moo (-moo), bob (-white), cock-a-doodle-doo, hush, whip-poor-will, etc.
- 3) S. Ullmann : *Language and Style*, p. 68.
- 4) *Ibid.* p. 9.
- 5) S. Ullmann : *Principles of Semantics*, pp. 86-92;  
“ *Language and Style*, pp. 66-74.

1) S. Ullmann : *The Principles of Semantics* pp. 86-92;  
“ *Language and Style*, pp. 40-49, pp. 66-74.

2) S. Ullmann : *Language and Style*, p. 8;  
E. Sapir : *Language* p. 120.

## (反復の型)

bow (-wow), ding-dong, choo-choo, chug-chug, pee-wee, puff-puff, quack-quack, etc.

## (擬声音的動詞)

dogs bark, cocks crow, bird chirp, sheep bleat, hens cackle, water bubbles, lions roar, trees rustle, etc.

ただし、これらの語の現在の発音は、歴史的な変化を受けて来ている場合が多いので、その語源にさかのぼってみてはじめて、もともとの模倣音が分る<sup>6)</sup>。たとえば、羊の bleat [bli:t] は、OE では blætan [ble:tan] であった。

カッコーの鳴き声 cuckoo は、そのままその鳥を表わす語になっているわけであるが、この語は、世界各言語に共通な性格を持っており、フランス語で coucou, スペイン語で cuclillo, イタリア語で cuculo, ルーマニア語で cucu, ドイツ語で Kuckuck, ギリシャ語で kókkix, ロシア語で kukushka というように印欧語で似ているばかりでなく、ハンガリア語で kakuk, フィンランド語で káki であり、漢語で「郭公」日本語で「カッコー」である。また日本語の「ほととぎす」もその鳴き声が語源と言われている。

動物の鳴き声を擬声音化する場合、日本語の「コケコッコー」は、英語で 'cock-a-doodle-do' であり [d] が入っているし、「ガーガー」というあひるのなき声は、英語で 'quack-quack' と [g] は入っていない。こうした相違について、英語国民は、自分達の国語の方が自然音に近いと主張するし、日本人は日本語の方が近いと感じる。これは聴覚の問題ではない。擬声音はその言語内で近似的な音での表現化なのだから一概に優劣は競えない。

## (2) Symbolic Sound (象徴音)

これによって作られた語を Symbolic word という。ウルマンは (1) を primary onomatopoeia とよび、これを secondary onomatopoeia とよんでいる<sup>7)</sup>が、この 'secondary' という語からも分るように、音を出さない対象物を、あるいは音を出すものであっても直接にそれを模倣するのではなく、その動き、大きさ、感情を間接的に表わす方法である。

(fl-は動く物をあらわす場合が多い)

flip, flap, flop, flitter, flimmer, flick, flicker, flutter, flash, flush, flare

(gl-は光りに関係がある場合が多い)

glare, gleam, glitter, glow, glimmer

(その他)

bang, bomb, bump, clang, clank, clatter, crash, crush, hiss, mumble, murmur, shriek, shrill, sizzle, sniff, snuffle, snuff, sprinkle, thump, thud, thwack, tremor, tremble, throttle, wack, wheeze, whittle, etc.

## (反復型)

この場合、第2要素の母音や語頭の子音を変えるものが多い。

6) 三省堂『英文法辞典』s. v. Sound Symbolism.

7) S. Ullmann: *Language and Style*, p. 69.

Cf. 小林英夫は、直接模倣(擬音語)と間接模倣(擬態語)と呼んでいる。『国語学辞典』p. 238.

hodg-podge, honky-tonk, hurly-burly, fiddle-faddle, flip-flap, jim-jams, snip-snap, tap-tap, teeny-weeny, tittle-tattle, zig-zag, etc.

否定を表わす語が、英語で 'no', 'not', フランス語で 'non', ドイツ語で 'nein', 'nicht', スペイン語で 'no', 日本語で「しない」というように [n] が入っている。[n] が否定の意味を象徴的になっているといえそう。

「小さい物」を表わす語に、[i] が入っている場合が多い。これは英語のみならずその他の言語にもみられる。

## (形容詞)

英語 little, slim, wee, teeny-weeny, weak, meek

フランス語 petit

イタリア語 piccolo

ラテン語 minor, minimus

## (名詞)

英語 kid, chit, imp, slip, midge, tit, chip, chink,

pin, pip, tip, whit

## (接尾語)

英語 -ie, -kin, -ling

しかしこの [i] にしても、大きい意味を表わす語に入っていて、反対に小さい意味を表わす語に開母音が入っている場合もある。(例: big-small)

また thin と thick は、同じ [i] を含んでいながら一方は「小」をあらわし他方は「大」をあらわしている。

'Crumble' と 'crumple' という語は、いずれも音声上象徴的な語であることは認めても、'crumble' が「こなごなにする」の意味でありが 'crumple' 「しわくちゃにする」の意味であるという関係、すなわち [b] と [p] にそれぞれの意味の相異をおこさせる必然的な違いがあるとは言い難いので、それは恣意的であると見た方がよいだろう。

17世紀半ば、フランスのヴォーゲラスは、galant という語を galant と galand の二つの書き方に分けて、galant の方を「立派な男」の意味に用い galand を「あまり好ましくない男」の意味に用いようとした<sup>8)</sup>。

'Smooth' と 'loose' が、外来語として日本語に入ったが、'smooth' は「スムーズ」でなく「スムース」と発音されているのは、「ズ」と濁らない清音の「ス」の方が、いかにも 'smooth' な感じを与えるのだろう。一方 'loose' は、「ルース」ではなく「ルーズ」と発音されている。これは 'smooth' の場合とは正反対に「ルース」より「ルーズ」と濁った方が 'loose' (だらしのない) 感じを与える為だろう。

外来語輸入の際にもこうした音象徴が作用しているように思われる。

## 3. Diagrammatic Motivation (図式的有契性)

ウルマンの3つの有契性の他にもう1つの有契性として、Diagrammatic motivation とでもよばれるべき有契性が考えられる。

アメリカの思想家、チャールズ・サンダース・パーズは、記号を研究し、「意味スルモノ」と「意味サレルモノ」との異った関連の仕方に基づく3つの独特な「表現特性」があることを述べている。

8) S. Ullmann: *Language and Style*, p. 221.

1. アイコン (類似による関連の仕方)
2. インデックス (連続性による関連の仕方)
3. シンボル (約束性による関連の仕方)

ここで 'Diagrammatic motivation' というのは、1. のアイコン特性のことである。種々の印欧語においては、形容詞の原級、比較級、最上級の違いは、音素の数の増加によって示される。

|         |            |
|---------|------------|
| high    | altus      |
| higher  | altior     |
| highest | altissimus |

このように、「意味スルモノは意味サレルモノの漸次増加の全幅を反映する<sup>9)</sup>」

またフランス語の人称動詞の複数形をみても：

|               |               |               |
|---------------|---------------|---------------|
| jø finis      | tu finit      | il finit      |
| nou finissons | vous finissez | ils finissent |

というように、「複数形の意味スルモノ」は、数が増したということ、かたちの長さを増す(従って音声も長くなる)ことによってあらわしている。

ローマン・ジャコブソンは、次のような結論を出す

「スラブ系言語において、様々な歴史的経過をたどっていくと、いつもかならず「より長い形・複数/より短い形・単数」というダイアグラムが組立てられていくのであるが、そのようなことや、あるいはそれに似た事実を言語的経験として与えられると、ソシュールの言明——「意味スルモノは、その音声構造においては、記号の価値や意味を想起させるものは何もない」——には、まったく賛成しえないことになる<sup>10)</sup>」。

やはり、そこには眼に見える有契性も存在するのである。

#### 4. 日本語と英語の透明性の比較

上に述べた4つの有契性のうち、第2の形態素的有契性に関して、日本語と英語についてその透明度を比較してみたい。

日本語を一瞥してみると、形態素の段階の有契性では、わが国固有の言語である大和言葉には、透明な語がないことが分る。漢字が透明性を担う。

漢字の六書のうち、象形文字と指事文字は、その字自身が透明である。たとえば、「木」「山」「川」「門」「馬」などの象形文字(エジプトの象形文字も同様に透明)、「一」「二」「三」「上」「下」などの指事文字が透明である。但しこれらは、形態素的有契性ではなく、第4に述べた Diagrammatic motivation を持つものである。

日本語と英語を、オグデン考案の Basic English によって比較してみる。

名詞化の接尾辞の付く語は、文法的形態を示す上で、透明である。この場合その構成要素の動詞の意味がわかれば、名詞としてのその語の意味がわかる。

- tion : addition, attraction, competition, etc.
- ment : advertisement, agreement, development, etc.
- ence, -ency : existence, tendency, etc.

接頭辞のつくもの：

across, destruction, transport ('across'+ 'carry')

Basic English に含まれている「文化語」は、日本語の方が後

で出来た為、日本語の方が透明である。

|        |               |
|--------|---------------|
| camera | 写真機 (真をうつす機械) |
| church | 教会            |
| clock  | 時計            |
| plane  | 飛行機           |

借用翻訳語の場合は、英語が透明なら日本語も透明である。

|         |                 |
|---------|-----------------|
| manager | 'manage'+ '-er' |
| 支配人     | 「支配する」+ 「人」     |

しかし、一般に、Basic English をその日本語相当語と比較すると、形態素的有契性については、Basic English の語は、それぞれが一個の形態素を成している場合が大半なので (agent を示す -er などは例外) 日本語の場合、複合語の形で表わされている為、日本語の方が透明であるといえる。その例として、英語が不透明で、日本語で透明な語を Basic English のリストからひろってみると

|          |                       |
|----------|-----------------------|
| plant    | 植物 (「まっすぐ立っている」+ 「物」) |
| family   | 家族 (「家」の「人」)          |
| dress    | 着物 (「着る」+ 「物」)        |
| hospital | 病院                    |
| future   | 未来                    |
| glove    | 手袋                    |
| sock     | 足袋                    |

「手袋」と「足袋」を比べてみると、「手袋」の方は、「てぶくろ」(手にはめる袋)と読むので耳で聞いても透明であるが、「足袋」の方は「たび」と読むより「あしぶくろ」と読むようになっていけば透明である。これは、ちょうど英語の 'forehead' を [fórid] ではなく [fó:hed] を発音すれば 'fore'+ 'head' でより透明であると言えるのと同じである。(最近に綴字発音の傾向がみられ [fó:hed] という発音も広まっているようだ。)

以上、Basic English について、日本語と比較し、日本語の方が透明な語が多いことをみてきた。つぎに、Basic English 以外の語について調べてみよう。

1年の月の名前は、日本式の「1月」「2月」…「12月」の方が January, February, ..., December よりも、順序を示す点で透明である。

'Telephone', 'telegram' は ('tele' が「遠い」と分っている人にとって) 透明だが、日本語では、「電話」(電気の働きを利用して遠方の人と通話する装置)、「電報」の字を当てている。'Illumination' には、新作複合語で「電飾」を当てている。'Telescope' は、「望遠鏡」で、これは calque かと思われる。

「冷戦」は 'cold war' の、「鉄則」は、'iron law' の、「人類」は 'mankind' の、「教師」は 'teacher' の借用翻訳語だろう。「教師」は、は古くは、単に「師」とよばれていた。また「先生」は、もともと、「先に生まれた(人)」の義であった。

'Newspaper' は「新聞」(「新しく」「聞いた話」)で、大体透明度が同じ、「発表」は「表」(おもて)に「あらわす」の意味、これに対応する英語の 'announcement' と 'publishment' のうち 'publishment' の方が 'public'+ '-sh' ('-ish' は 'having the quality of' の意味の suffix) で、'announcement' より透明であると言える。

以上、日本語と英語というまったく語族の異った言語についてその透明性を比較した。しかもその範囲が Basic English と、

9) 河出書房『ディオゲネス』I. p. 44.

10) *Idid*.

その他少々の語について比較しただけである為、不備であるかもしれない。

また透明性で問題となるのは、どの程度まで人間の分析力というか判断力を可とみるかであろう。つまり、たとえば、「宗教」における「宗」は、「神をまつる、みたまや」の意味で、ひいては、「尊い物」の意味であり、そのことを知っている人には、「宗教」は、「宗の教え」で、透明に感じられる。英語でも

animal < anima (生命) + -al

library < libr (本) + -ary

であり、そういう古典的知識を持っているなら透明であると言えるだろう。‘mortgage’ (抵当) という語でさえ、語源的には <OF ‘mort’ (dead) + ‘gage’ (pledge) で、この場合も、古典的知識の多い少ないによって透明度も左右される。

## II. 幼児の言語習得と透明性

言語における透明性 (有契性) が、幼児の言語習得上どういう意味を持っているであろうか。幼児の言語習得という問題は、非常に大きな問題で、容易に解明出来る問題ではないので、ここでは透明性に関してのみ考えてみたい。

幼児は articulation (はっきりした発音) ができるようになるまでは、音をくりかえす傾向をもっている。自然の音をそのまま口にして ‘bow-wow’, ‘puff-puff’, ‘sch-sch’ (汽車の音) ‘tick-tock’ という形の語を発します。従って幼児にとっての「イヌ」は、ドイツ語で ‘wau-wau’, フランス語で ‘oua-oua’, オランダ語で ‘waf-waf’, 日本語で「ワンワン」ということとなります。1才から2才にかけて ‘bow-wow’ が ‘dog’ に、‘wau-wau’ が ‘Hund’ になるように教え込まれる。従って、前にあげた「カッコー」は、幼児にとっておぼえやすいと言える。つまり、onomatopoeic word は幼児にとって習得しやすい。4つの有契性のうち第1の phonetical motivation を持つ語は幼児にとって習得しやすいと言える。第2の morphological motivation は、より高次の段階で有用であると考えられる。

心理学者スターンの報告によると、彼の子どものヒルデは、4年3か月の幼児の時、「まぐろ」を見せられて、その魚の名前が ‘Tunfisch’ であると教えられると、「この魚は何をする (tun) の?」と父親にたずねたそうです<sup>11)</sup>。つまり ‘Tunfisch’ を ‘tun’ + ‘Fisch’ に分解して理解したわけです。

幼児がそういう風に言葉を理解しているとすると、morphological motivation の多い言語の方が幼児にとって習得しやすい、すなわち早く sophistication がおこなわれると考えられるわけですが、幼児期において、すべての幼児が ‘Tunfisch’ を ‘tun’ + ‘Fisch’ に分析する能力があるかどうか疑問である。上記の幼児は4才であり、たまたま「魚」(Fisch) を目の前に見ているから言葉の分析をしたのであろう。

同様に、日本の幼児に「てくび」をおぼさせるのに、親は決して「手」+「首」(手の首)の組み合わせを理解させようとはせず、あくまで「てくび」として教える。「手首」「足首」を複合語的に認知するのは、漢字の教育を受ける段階になってからである。

これは、堀川直義氏の次の主張と関係があるだろう。「事がら

11) 矢田部達郎『児童の言語』p. 71.

によっては表意的な漢字を思いうかべて漢字で思考することもある。しかし子供にはあまり漢字的発想はないように思われる<sup>12)</sup>。

これは、言語の本質にも関係がある。すなわち、言葉は話し言葉が第一であり、人類の歴史と同じ歴史を持つのに反し、書き言葉は七千年ぐらしか歴史を持たなく、第二次的であるのだ。

村上昭三氏が「幼児の言語発達」の中で、幼児後期において幼児が和語から漢語に組み替える段階があり、統計上3才にして幼児の半数以上が「練習」「約束」「道路」「反対」などの漢語をおぼえるし、6才では「迷惑」「工事」「修理」「用意」「説明」「休憩」「冒険」「相談」「貧乏」「秘密」などの漢語をおぼえてしまうと言っている<sup>13)</sup>。しかしここで注意しなければならないことは、幼児にとっては、「練習」は「れんしゅう」なのであって、漢語という意識は持たないままそうした難しい言葉を習得していくことである。これは、人間の幼児の言葉習得という場合にみられるすばらしい能力を示している。

形態素上の透明性が語彙の拡充で有効になるのは、幼児期を過ぎた修学児童期においてであるように思われる。

## ま と め

言語の有契性について考察し、幼児の言語習得との関係を述べて来た。

世界の言語の中で、その言葉に有契性が全然無いという言語は存在しない。従って言語の起源を、音声象徴に求めようとした人もいるわけで、言語に象徴性が多分にあるが、しかし、そうした有契性のある場合は、ごく限られている。

やはり言語の恣意性ということは、言語の大部分について言える。A.A. ヒル氏の主張を結論的に加えたい。

...the connection between the sounds, or sequences of sounds, and objects of the outside world is arbitrary and unpredictable. That is to say, a visitor from Mars would be unable to predict that in London a given animal is connected with the sound sequence written *dog*, in Paris with the sequence *chien*, in Madrid with *perro*. The arbitrary quality of language symbols is not infrequently denied, for a number of reasons. Sometimes the denial is based on nothing more than the notion that the forms of one's native language are so inevitably right that they must be instinctive for all proper men. Sometimes the denial is more subtle. It is often maintained that all language (sic), even though now largely arbitrary, must once have been a systematic imitation of objects by means of sound. It is true that there are some imitative words in all languages, but they are at best a limited part of the vocabulary.<sup>14)</sup>

また、形態素のレベルでの有契性は、複合語がその中核となっているわけであるから、日本語と英語を比較してみたように

12) 『児童心理』第22巻、第4号、10頁。

13) 同上誌 49頁。

14) A. A. Hill: *Introduction to Linguistic Structures*, p. 4.

Basic English に関する限り、日本語の方に多くの透明語があることがわかった。しかし、幼児の言語習得に際しては、複合語という感覚は、幼児期には無いと思われるので、形態素上の有契性の有無は、音韻のレベルでの有契性と異なり、幼児の自国語習得にはそれほど影響が無いと思われる。漢語的感覚は、書き言葉をおぼえる段階に入ってから現われる（養われると言った方がいいかもしれない）ので、その段階で形態素のレベルの有契性が有

効になる。‘Fingerhut’ のような形態素上透明な語が 外国人にとっては分りやすいと言うウルマンの主張と同じことを意味している。

ジャコブソンの論文は、形容詞の原級、比較級、最上級の形とか、単数形、複数形を問題にして、有契性を主張しているわけである。これは、有契性を、統語論の中で究明したものと言える。

(完)